



## 平成二年が明けて 湖陵新時代の幕開き



湖陵高校同窓会長 長内 宏

平成二年、道東の元旦は穏やかに明けた。二十一世紀間近かの現代は変化のテンポも愈々早い。世界情勢は誠に流動的であるが人類悲願の恒久平和、共存共栄の確立へ向け今年こそ大飛躍あらん事を願わずには居られない。

待望久しかった湖陵新校舎は目下急ピッチで工事が進められ、愈々夏には一部を残して完成予定である。七十七年余に亙り馴れ親しんで来た学舎の地湖陵ヶ丘を去る事は正に感無量である。否、断腸の思いを抱かれる向きも多いかと思われる。併し湖陵新時代への発展の為、緑ヶ岡は又とない新天地である。わが母校の未来を拓くに当り、心からの御讃同を切にお願ひ申し上げる所である。

創中開校以来の大事業と相前後して近年中に創立八十周年を迎えるのも又時の流れではある。目下これらの事を総括し、創立八十周年並びに新校舎落成記念祝賀の催しが提案され、学校当局を中心に P.T.A. 後援会、同窓会が一体となり「協賛事業」を進める計画が進行中である。何れ正式な発表と

共に、母校愛に燃える各位の暖かな御協力を要請申し上げる所存である。

懸案の同窓会館建設は校舎の落成をまつて活動が再開される。新校舎に相応しいユニークな会館、学生諸君の日常活動にも役立つ様な内容を盛っていきたいものと考えて居る。

同窓会活動の輪は年々着実に拡がりをみせて居るが本年四月、愈々東京支部の設立が予定されて居る。誠に喜ばしい限りであり、発起人の方々の御労苦に対し心より御礼申し上げる次第である。又各期毎の活動もさる事ながら、一方に於いて教職員湖陵会、市職員湖陵会を始めとする職域組織での活動も盛んである。正に同窓の連帯の強さを物語るものであろう。本年は湖陵四十二期生が旧校舎での最後の卒業式を終え巣立って行く。

新卒業生諸君の栄光を祈ると共に同窓生各位の御健勝御多幸と、一層の御活躍と心より御祈念申し上げる次第です。

## 新しき伝統の構築にむけて



学校長 森 正徳

母校に戻っていただいて一年が経ちます。教職員、生徒諸君の歌う思い出深い校歌で迎えられた感激を、常に「初心忘るべからず」の気持ちで自分の裡に持続させることを肝に銘じ、職務に励んでまいりました。

おかげさまで、新校舎工事も、過去の常識では考えられぬスピードで進められ、体育館、格技場も来年九月にはすべて落成し、直ちに授業が開始出来る状態で、九月末に全校一斉の移転が実現します。これまで同窓会の皆様にもその実現を悲願としてお頼みしてきた新校舎も、春探湖を目下にする緑ヶ岡の「湖陵」の地にその偉容を一日とあらわしつつあります。

全道にも誇り得る素晴らしい設備を擁する校舎が誕生する緑ヶ岡の地に、「新しい湖陵の伝統」が構築されることとなります。八十年の歴史と伝統を誇る本校の軌跡のなかでも画期的ともいえるこの大切な時期に学校経営を委ねられた者として、この大事業を円滑に行い、更に新校舎に新しい息吹きを吹き込み、輝き次代へ挑戦していく

橋頭堡をつくることこそ、その責務と痛感し、自ら厳しく心をひきしめているところです。

先般、同窓会総会に出席させていただき、年齢を超越し、母校への滾る想いの中で即座に青春をとり戻し、母校愛の紐帯で結ばれた中で、語り、笑い、肩をたたきあう皆様の姿に接し、いまさらながら母校愛の深さに感じのりました。母校に寄せられる皆様の熱きご期待もひしひしと胸に迫って参ります。このご期待に応え、時代に適合することなく、時代に適合した形で新しき湖陵の伝統を構築し、いずれば皆様と肩を組みあえる有為な人材を育成していくことこそ私の責務と考えております。

この一年、全力を傾注し学校経営にあたって参りました。補習週二回実施等、確実に前進している学校の鼓動を感じている毎日です。常に同窓会の皆様のご支援に支えられ、感謝の念の絶えることのない日々ですが、今後共変わぬご指導をお願い申し上げます。



## 湖陵高校同窓会

# 東京支部結成、間近

## 東京支部

### 結成にスタート

#### 発起人会事務局

昨年十一月十一日夕刻、東京千代田区半蔵門のダイヤモンドホテルに、かつての湖陵男子が、釧中組を先頭に、湖陵女子もまじえて三々五々集まって来ました。

総勢四十八名、湖陵同窓会東京支部結成発起人の面々です。

釧中組は七期の永井保さんを先頭に七人、湖陵は二九期までの働きざかりの面々です。

昨年五月に永井保さん、河村功さん（釧八）の釧中会のメンバーを中心に、東京湖陵会を作ろうではないかとの話しが盛り上がり、河村功さんが発起人代表になって半年余り、何回かの準備委員会を経て、発起人総会の運びとなったのです。

発起人総会は校歌の斉唱から始まりました。何年ぶり、何十年ぶりの校歌ですが、不思議にスムーズに歌声がこだましました。

会冒頭の発起人代表河村さんのあいさつは、もうすでに東京支部が結成されたかのごとく紅潮感激のあいさつ、本部長内安会長の祝辞ご披露に次いで、釧中十五期の梅津正隆さんの議長により議事が進行しました。

その結果、支部結成目標が再確

認され、推進組織として委員会、幹事会の設置を議決、次のように各委員長が決まりました。

組織委員長 栗村英二（湖一）  
総会実行委員長 富山秋美

（湖二）

財務委員長 永井 保（釧七）  
総務委員長 鈴木正雄（釧十七）  
事務局長 澤山右尚（湖四）

次いで各委員が指名されたのち、総会実行委員長から、予め準備していたようですが「湖陵同窓会東京支部結成大会を平成二年四月二十八日（土）に、当ダイヤモンドホテルで開催したい」旨の提案があり満場一致で決定しました。

この目標に向けて各委員会は、実行推進を結束して最後に釧中十三期の波岡正治さんが元気みなぎる激励を込めた決意表明の結びの言葉で議事終了、懇親会に移りま

した。

本番は懇親会とばかりに、総会実行委員会のメンバーが総出で活躍、大いに盛り上がり、一きよに少年、少女にタイムスリップしました。

ひとりひとりマイクで、自己紹介を兼ねて昔話し。中には、マイクの順番が廻ってこなくて、ご機嫌斜めの先輩も。

二時間の予定時間は、あつと言う間で、時間延長、再延長でした。

結成大会の本番は、どんなことになるやらと、ある委員長は早くもうれしい心配です。

結成前夜祭を思わせる発起人総会は無事終わりました。

しかし、結成への道のりは、これからです。

今後とも、同窓会会員各位の絶大なるご助力をお願い申上げる次第でございます。

道内各地でも、湖陵高等学校同窓会支部ともいうべきものが、誕生しつつあり、大変、よろこんでおります。

現在のところ

室蘭支部  
苫小牧市支部  
旭川市支部  
帯広市支部  
等が伝えられております。



KUJURO SOUJI PRINTING

知性と工夫で勝負する情報集団

**SP 釧路総合印刷株式会社**

〒065 釧路市白金町18の2 TEL.0154-23-9201 FAX0154-23-9205



室伏見真

それぞれの期待や希望を胸に秘め、この湖陵高校に入学してきたのも、もう三年も前の事になりました。三年という年月は、長いようで実に短いものでした。

この三年間は、数えあげればきりがない程、本当に色々な出来事がありました。様々な人達との出会いや別れがありました。

僕達卒業生は、これからそれぞれの人生を歩むことになりませんがこれまでのように、高校生という名のもとに保護されてきたようなわけにはいかないと思います。「責任」という二文字も、これまで以上に重く肩にのしかかってくるでしょう。多くの困難にも直面することでしょう。しかし、「自信」を失なってしまうのではないかと。僕達は、この三年間を無駄に過ごしてきたわけではありません。諸先生、諸先輩、その他大勢の方々のおかげで、勉強はもちろんのこと、その他の面においても実に多くの事を学んできたはずで、そのことを決して忘れてはいけな

高校卒業生だということに、自信と誇りを持ち続けていかなければならないと思います。

又、僕達はこの三年間に、様々な学校生活を通して多くの友人を得ました。これも、高校生活の中で忘れられない貴重な事だと思います。進む方向はまちまちですが、きっと大なり小なり、この友人達の助力を得ることもあるでしょう。もちろん、この出会いの多くは、湖陵高校あつてのものです。卒業に当たり、僕はこの学校に感謝の気持ちで一杯です。

最後に、現在の校舎もいよいよ新築され、在校生達には設備の整った新校舎へと移るわけですが、諸先輩が築き上げた、この鋼路湖陵高校の古き良き伝統をいつまでも失わずに、さらに磨き上げていくことを在校生達、そしてこれからの新入生達に大いに期待しています。

## 学窓を築立つ

毎日のように着ていた制服もいつの間にか古くなり、気がつく卒業です。高校生活三年間があつ

という間に過ぎ去ってしまいました。

私は高校に入学すると同時に弓道部に入り、その時から引退するまで、頭の中はほとんど弓道一色の生活でした。弓を習っていたの頃は大会があつても手伝いはするだけでした。しかし、先輩が真剣に弓を引いている姿を見て、張りつめた空気が、静けさ、矢が的中する音、そうした道場全体の雰囲気、それが魅せられ惚れました。

これが私の弓道の一歩でした。この雰囲気、この練習に熱中しました。のにしようとして練習に熱中しました。弓道は勝負する時は一人ですが、練習する時は自分自身の弱点はなかなか発見できないので、一人ではできません。私は、辛口批評もし、温かい言葉も下さる先生と、前へ前へと引っ張ってくれた先輩と、いつも一語に練習し、大会や



滝沢道子

昇段審査で互いに励まし合った大切な仲間を支えられてきました。このような出会いがあつたお蔭で、三年生最後の昇段審査に合格(参段)することが出来、皆さん一人一人に感謝の気持ちでいっぱいです。

将来私は、高校の教師になりたいと考えています。やはり湖陵高校に来て出会った先生の影響が強いようです。部活動引退のショックから私を立ち直らせ、それぞれの目標へ導いて下さった担任の先生、顔を合わせる度に声をかけて下さった教科の先生、いつかは先生のようになり、何十年か後にはそれを越えたいと思っています。

最後になりましたが、私達はこの湖陵の制服を着て、富士見の校舎の最後に思っています。ありがとうございました。

あたたかなふれあい



太陽のように  
明るく暖かい真心で  
良い品をより安く  
ご奉仕する

セオチェーン

- 妹尾商店 新橋大通1丁目 ☎25-5345
- 新富士ストア 新富士駅前 ☎51-3467
- 愛国ストア 愛国西3丁目 ☎36-3399
- 白樺ストア 白樺台1丁目 ☎91-5423
- 昭園ストア 昭和北1丁目 ☎51-8853

さつぼろ地下街オーロラタウン  
ギフトブティック

ペルソナ

オーロラプラザ前 ☎(011)241-3830

●味が自慢の本格派レストラン●

ステーキハウス アポロン

新橋大通1丁目妹尾商店向 ☎25-7023  
営業時間 / AM11:00~PM9:00



# 青春譜・湖陵ヶ丘

《21》



釧中32期 奥田達也

## 寮歌いま尚

青春は老いてますます盛んとなる。齢七十歳を越えて尚、いや更に湖陵ヶ丘での情熱は、地下のマグマが絶えず噴出するように沸き

# 愛唱は続く

を弾き弾き作った」とも  
跡」と菅原覚也元教諭

平成元年九月二十八日に釧中十三期の同期会を定山溪で開く。それに先立ち、釧中寮歌の作詞者を特定したい」と旭川の波岸嘉蔵から菅原覚也の嫡子式也に依頼がきた。寄宿舎出身者が鶴見作詞説を札幌の釧中同窓会で言っている。前年の十勝川温泉で開いた同期会で「作詞は釧中教諭菅原覚也先生、曲は釧中物理教諭鶴見専一先生が母校の官立仙台台高等学校の寮歌を協力のため提出された」と前置きして二十名の出席者に何度も繰返し指導した波岸。昭和四年の釧中五年生の夏に同級生から習い、素晴らしい立派な寮歌を愛唱し続けた彼の青春なのだから。しかし同期で唯一の在寮経験者室内健一さえ責任を感じ乍らも疑問をもつ。詞は鶴見か。

釧中寄宿舎寮歌 作詞鶴見専一 作曲不詳の四番迄の歌詞が筆字で書かれ「これは札幌在任の同期で三問違いないと思います。(作曲は化学の鶴見先生とも聞いています。が)もともと書道の心得がある

ので立派な字です」と十五期の青木武夫も湖陵高校へ届けている。次の寮歌の四番が除かれているだけなのだ。

釧中寄宿舎寮歌  
一、北斗の直下渺茫と  
千古の森の蔭宿す  
湖陵に聳ゆる自治の塔  
栄光燦たり我が学舎  
二、瞳みは深し鈴蘭の  
花咲く園に佇(たど)めば  
原始を偲ぶ斧の音  
土の香嫩し蝦夷の春  
三、霧立ち込む釧路川  
筏に燃ゆる篝火の  
灯影おぼろに流れ行く  
水路運びき三十里  
四、夕日に映ゆる白樺の  
梢に散るや花吹雪  
水柱は銀の瓔珞か  
狂ふは嵐地の調  
五、理想は高し阿寒山  
望みは広し太平洋  
山の幸あり海の幸  
結ぶ夢こそ圓かなれ

「鶴見先生が授業中に寮歌を、自分の作詞」として歌っていた」と十五期の田中正己が兄から聞かされていたらしい等の情報が入る。

三十二期の寮生小森昭から送られた資料の中より音譜(彼の吹込みテープを復元)は波岸が旧制仙台高等工業(現東北大学工学部)へ比較検討を依頼する。小森が七十周年(昭和五十八年)懇親祝賀会で七期、釧中教諭の三原正二の「校歌の二年前に出来た。原正二の「校歌の二年前に出来た。詞は菅原、曲はどこかの寮歌の節をもつて」と聞いてコメントを残している。

一方、波岸は釧中校歌との共通類似を調べ上げた。湖陵に立てる(聳ゆる)我が学舎、鈴蘭、丘、園、理想は高し阿寒山、吹雪などなど。菅原教諭に指導を受けた波岸には激しい思込みがある。更に云う。両方の作詞された時代背景から大正デモクラシーの隆盛にも漸くかげりが見えはじめ「日本に還れ」(日本的なものへの回顧)軍部台頭などの兆しがあらわれ始めた時、校歌と寮歌の両者には少しも時局慨嘆、軍部憧憬の言葉がない。即ち学び舎とは自由精神の漲る自治の塔であり、ここに集う若き学徒は深い友情に固く結ばれ、師恩を讃え、尊い理想を追究する。権力、時潮に屈せず、阿らず、悠々と正道、大道を歩んでおられた、先生の人柄がそのまま流露した両歌である、と。

校歌誕生の昭和三年卒、十二期平方弘は云う。釧中寮歌といい校歌といい菅原覚也先生の作であることに間違いない

御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

政府登録国際観光ホテル・日本ホテル協会会員

## 釧路パシフィックホテル

中村 隆(釧中27期)

釧路市栄町2丁目6番地 ☎24-8811

れんが屋★AM11:00~PM11:00  
トロイカ★AM 8:00~PM11:00  
パシフィックイン・八まき・八宝園



# 我が青春と

## 鶴見先生が「マンドリン 校歌と寮歌は我が足



釧中32期 小森 昭 が吹込み  
瀬野正造 に復元して貰った音譜

ない。両方菅原先生が精魂をこめて心血をそそいで作ったものである。あの二つの作に先生の精神が現われている。作曲は勿論、間違いなく鶴見先生である。曲が出来てすぐ先生がオルガンを弾き乍ら生徒に教えていたのを俺の目で見ていた。そして寮生ばかりでなく俺達にも教えて貰いたいのにと羨望とも不満ともつかぬ感じがあった。先生にも伺ったが、その時、「自分がマンドリンを弾き弾き作ったと。どこかの寮歌の節をもつて」とか（自分の作詞として歌っていた）など先生を冒瀆するの甚だしい。あの当時すでに菅原先生作詞鶴見先生作曲ということは周知の事実だったし、鶴見先生が自分の作曲だと教室で歌った

としても自分の作詞だと云うはずがない。伝説が臆測を生み臆測が曲解されて釧中寮歌史の上に不愉快なしみを残したことは誠に残念でならない、と。

釧中初の音楽会は寮歌誕生の前年大正十五年の秋、小林啓一郎ら音楽グループが文芸部内に生まれて開かれた。榊原直先生の尺八、鶴見先生の三味線による「黒髪」演奏が当日の圧巻であった。

鶴見専一は多趣味多芸である。作曲は勿論、作詞をされても不思議ではない。それが鶴見作詞説を生んだのかもしれない。

しかし作詞の格調は菅原寛也のものであることは彼岸の共通類似表をみても明らかであろう。

そうしたとき、湖陵高校創立八十周年（平成三年）にむけて記念誌作成の準備で忙しい和田信幸教諭（湖陵高二十七年卒）から、「昭和三十四年に発行された湖陵同窓会報の創刊号に菅原寛也先生が寄稿された『湖陵に拾う』わがあしあと『日出づる国の北陸に』という校歌と『北斗の直下びょうぼう』の寮歌を作ったことは、感懐深い我が足跡である。（本行寺任職、元釧中教諭）と書いております」との朗報が飛び込んだ。

誠に明快な一文であった。  
校歌の作詞について、遺稿で、

「文芸部長であった私が作詞をすめられ、起稿して高野辰之博士に校閲を乞い、出来上がったのが昭和三年の春であった。これは私が作ったというよりも、雄大な郷土の景観と夢多き若人のいのちの中から生まれるべくして生まれた詩である」と。

校歌作詞について釧中二十三期の鈴木善一が「恩師の死」に記している「原歌の一ヶ所に、菅原氏が本行寺の住職でもあったことから、抹香臭い文字があったことである。その一ヶ所を改訂してもらい、改訂の二文字とは何処かを、聞き洩らしたことは呉々も残念である」と。

応援歌ナンバーワン「湖陵に長し」が出来たのは六期生が校内對抗運動会で橋北、橋南、寮と三つに分かれて競った千六百リレーで橋南チームが、応援のために作ったのが始まり。その後、ふえてくるが、作詞作曲とも不詳のまま古き良き時代が流れ去った。曲が他校からの替え歌なのもある。ただ甲子園で歌われる曲に同じものがないのが幸い。

青春を謳歌した凡ての歌が、老いても尚、愛唱されることは作者の満足であろう。

御卒業・御入学の喜びを1枚の写真に……

湖陵・江南・北陽・星園・短大高校他  
市内小中学校卒業アルバム専属作成

株式会社 工藤写真館

工藤寿男(釧中26期)

釧路市南大通5-3-7 TEL 41-5751

駐車場(20台収容)完備



# 同窓会記念講話

「二十一世紀に生きる」

「21世紀に生きる」同窓会講話

(平成元年10月26日・公民館)

講師・中川時弘氏

(NHK釧路放送  
局長・湖陵四期)

中川時弘さんは、東北・北海道が未曾有の冷害に見舞われるなど戦争への前ぶれを思わせた時代、昭和九年の生れ。昭和十六年、日本は太平洋戦争に突入。やがて敗戦を迎えて混乱のルツボと化した世情の中、一年後の二十一年四月旧制釧中最後の入学生となる。そのためいつも最下級生であった。また明日の糧もままならない食糧難の時代を過ぎた故、学校給食は勿論、修学旅行も知らない世代でもある。その釧中時代、氏は「戦後初めて米国に招かれた八代斌助さん(釧中一期生・日本聖公会会長)の講話を聴いたとき、とても



不思議な感じがした。八代さんが優れた国際人であったからではないか」と、遠い中学生時代の思い出を自己紹介の中で語る。在学中学制改革があったため、湖陵四期生として昭和二十七年本校を卒業。氏の講演は、「美しい日本語を守ってほしい」、「世界に向かって目を広げ、立派な国際人になってほしい」、この二点を柱に約一時間にかたり若い後輩にむかつて語りかけ

ました。(以下要旨を記します)

・「言葉について」……美しい日本語を守り育ててほしい。言い換えると語彙の豊かな日本語をどんどん使ってほしい。例えば、スーパーでの店員の話のやりとりを聴いているとき、誠意のない省略した言葉遣いを耳にすることがあり日本語がかわいそうである。

NHKの仕事は、正しい日本語の使い方に関わるものであるし、日本人は言葉に対して敏感な民族でもある。高校時代は自分の言葉が決まりかける時期でもあるので、色々な言葉を、色々な場で、色々な風に使ってほしい。

・「国際人について」……二十一世紀には現在の高校生は主役となる。であるから立派な国際人になってほしい。国際人とは、英語が話せる、留学したということではなく、色々な人間の中で司会者(チエアマン)になれるということであり、外国人と議論し、それをまとめることができる人、それが真の

国際人の姿である。そのためには日本語に堪能であることも必要。

・「情報化について」……十年前からNHKスタッフによってハイビジョンを開発し、日本人の発明の最高のもの」と称賛され、国際的衝撃をもって迎えられた。欧米の反対があるが国際統一規格のものとして世界の情報化に寄与したい。

・「二十一世紀という時代」……十九世紀、ニーチェは「神は死んだ」と言った。二十世紀は「神は死んだが、人間が支配した」と言われる。しかしこれは人間が様ざまものを荒廃させた時代とも言える。二十一世紀は「心の豊さを取り戻す時代」である。資源(環境)、コンピューター制御、情報化社会の肉付けなど、これらは科学技術の問題ではなく、心の在り方が問われるものである。頑張ってください。

(記録・田口耕平・湖陵30期)



釧路市幣舞町2番2号

株式会社 吉井写真館

代表取締役 吉井 祥 朔 (湖陵18期)

電話 41-4798番

御卒業・御入学の  
晴れの日を  
歴史の1ページに…

# '89 学園だより

同窓生の皆さまいかがお過ごしですか。「くまざき」21号の発行にあたり、母校のこの一年を概略振り返ってみたいと思います。

## 〈四月〉

- ・新年度スタート。町田康雄前校長勇退、後任として第22代森正徳校長北陽高校より着任。さらに白石進教頭、夏野毅事務長をはじめ9名の教職員の皆さんを迎える。
- ・平成元年度入学式（4月10日、新入生四四七名）。

## 〈五月〉

- ・高体連根支部予選など対外競技始動（6月上旬まで）。
- ・教育実習（22名）いづれも本校卒業生、2週間。

## 〈六月〉

- ・宿泊研修（一年生弟子屈イナセランドにて、次年度より宿泊施設としてホテルを利用）。
- ・高体連全道大会（サッカー、ハンドボール）男子準優勝、弓道男子個人準優勝・全国大会へ、柔道、バスケットボール、硬式テニス、体操、陸上男子一六〇〇MR6位、全国大会へ。
- ・放送局NHKコンテスト全道大会朗読・アナウンス両部門で優秀賞・全国大会へ。

## 〈七月〉

- ・夏期進学講座（三年生、英教国延べ五二七名受講）、他に一、二年生校内補習授業。
- ・放送局NHKコンテスト全国大会（東京、朗読部門で若生みどり優秀賞）。

- ・国体全道予選（バレーボール、卓球、陸上）。
- ・新校舎工事本着工（平成2年8月完成予定）。

## 〈八月〉

- ・全国高校総体（四国各県）に陸上一六〇〇MR中谷・能勢、立田、山田、弓道・小笠原綾一）。
- ・合唱部全国大会へ（岡山）。
- ・図書道全道研究会へ。
- ・軟式テニス新人戦全道大会へ。
- ・第39回湖陵文化祭（25日、28日、テーマ「燦・輪・翔」）。

## 〈九月〉

- ・美術部全道美術展、合唱部全道合唱コンクール、新聞局全道研究会へ参加。

## 〈十月〉

- ・幻のフィルム。発見！昭和33年アイスホッケー全国大会初優勝時の凱旋風景など収録。
- ・高文連全道大会（書道、写真、アマ無線）物理部門で最優秀賞、美術！桑原一哲文部大臣賞）。



高校総体出場の小笠原君

- ・新人戦・選抜全道大会（陸上、硬式テニス、軟式テニス、サッカー）3位、柔道、弓道女子団体3位）。
- ・第14回同窓会教育講話（二年生対象、「21世紀に生きる」講師・中川時弘氏・湖陵四期NHK銅路局長）。

## 〈十一月〉

- ・見学旅行（二年生、5泊6日・京都・奈良・東京方面）。
- ・80周年記念誌校内にて企画検討（今回は写真集とした）。

## 〈十二月〉

- ・P・同・後・学各長による創立80周年（定時制70周年）並びに新校舎落成記念事業協賛会の準備委員会発足（2月中旬総会で正式発足）。
- ・高体連アイスホッケー（帯広）。
- ・改築校舎（4階建）外調を現わす、改築工事例になく順調に進行（9月移転の予定）。

## 〈一月〉

- ・本年度より「共通一次試験」にかわり「センター試験」実施（13・14日、二九六名受験）。
- ・本年度より三年生、三学期を午前特別時間割による授業を開始。
- ・ハンドボール選抜北・北海道大会優勝！9年連続10度目（全国大会・3月名古屋）。



新校舎工事本着工

### 平成元年度（平成2年3月）卒業生の動向

	進学希望	就職希望	家事自営	その他	合計
男子	243	10(6)	0	0	253
女子	153	13(9)	0	3	169
合計	396	33(15)	0	3	422

( )内は就職内定者

### 平成元年度（平成2年3月）卒業生の受験校（延べ数）

	男子	女子	合計
国公立大	411(344)	159(85)	590(429)
私立大	228(286)	121(94)	349(380)
短大	6(12)	130(94)	136(142)
各種専門校	6(6)	35(40)	41(63)
準大学	6(9)	0(0)	6(9)
合計	677(657)	445(313)	1,122(1,023)
	1人当りの受験校	2.8(2.6)	

( )内は昨年

・防災避難訓練（旧校舎焼失を記念して毎年この時期に実施）。

〈三月〉

・平成2年度入学選抜学力検査（定員10学級四四五名）。

・第42回卒業式（卒業生四四二名、卒業生総数一九五九九名）。

以上紙面の制約もあり、手短かな内容となりました。ご容赦下さい。今後とも母校や後輩のためによりよくご協力をお願いいたします。（文責・湖四期・和田信幸）

## ゴルフショップ 三幸

新橋大通5-1

代表 宮本英司

——先輩、後輩よろしく頼みます。湖陵17期——



# 事務局だより

同窓会会員の皆様におかれましては、常日頃から同窓会の運営に際し、ご支援、ご協力を賜わり厚くお礼申し上げます。

さて、平成元年度釧中・湖陵同窓会総会も八月十三日に約五百名の参加者により釧路キャッスルホテルに於て盛大に開催することが出来ました。当番幹事期であります七期、十七期、二十七期の皆様には大変お忙がしい所、貴重な時間を割かれ何日も会議を開き、実に素晴らしい総会、こん親会を企画して頂きました。参加者一同おおいに楽しみを満喫した所であり、当番幹事の皆様のご労苦に対し心から感謝申し上げる次第でございます。



います。

しかしなんと申ししても平成元年における我が同窓会の特記事項は、ブラジル産の石を用いた記念石碑の完成でございます。ブラジル産の石の入手については皆様がすでにご承知のことと思われるので深くは触れませんが、ブラジルにてご活躍の釧中八期の相場



長内宏氏の筆による校歌が刻まれた石碑

真一氏からの心温る奇贈でございます。その母校を愛するお気持ちに對しましてただ頭の下がる思いでいっぱいでございます。

頂きました石は東海興業さん、篠崎石材店さんのご協力を得まして平成元年三月二十日に長内会長始め多くの関係者が見守るなか、目出度く除幕式が行なわれ校章、校歌が刻み込まれた石碑が輝かしく校舎前庭に設置されたものであります。今後この石碑を朝な夕な見られる生徒の数は図り知れません。しかしこれを胸に湖陵魂を発揮出来得る学生諸君の心は皆同じでございます。そしてこの石碑をいつまでも大切に守って頂きたいと思っております。

同窓会といたしましても校舎改築、八十周年、そして同窓会館建設問題など平成二年も非常に重要な課題が山積しております。どう

か会員皆様のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。事務局からのおたよりとさせていただきます。

幹事長 関口 政司

## 『お願いします』

開校八十周年記念協賛事業の一環として、現在、まだ正式決定ではございませんが、開校八十周年記念写真集の発行を企画中です。

同窓生の各位にお願いですが、その写真資料を集めております。特に、大正時代（開校当時）から昭和十年頃までの資料が皆無です。

ぜひ、ご提供下さいますようお願い申し上げます。

提供先 釧路湖陵高等学校  
和田 信幸先生

## 編集後記

平成二年の春を迎え、今年一年希望に満ちた年でありますよう、心よりご祈念申し上げます。

本年は、待望の我が湖陵高校の新校舎が完成し、生徒諸君も新校舎への移転にむけて、何かと忙しい年になると思えます。

私たち同窓生といたしましては新校舎完成の喜びを、何らかの形

で示し合いたいものと存じます。明年九月には、落成記念式典と同時に開校八十周年記念祝賀会を合わせた、記念行事も計画中和聞いております。

ぜひ、同窓生が相い集い盛大な記念行事が挙行されますよう、同窓生各位には特段の御協力を、今年のうちからお願いいたします。事務局だよりにもふれてありますが、母校の前庭にりっぱな石碑がございます。現会長、長内先生の力強い筆で校歌が刻まれております。

新校舎の移転と共に石碑も緑ヶ岡に移転されますが、ぜひ、ご一見されますようご案内申し上げます。

旧校舎、最後の卒業生となられる卒業生諸君の前途に、ますますの御多幸、御発展を心より祈念いたします。

末筆ながら、原稿をお寄せいただきましたました諸氏に感謝申し上げますと共に、今後とも一層のご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。

(吉井記)

編集委員

長内 宏・遠藤 隆吉  
関口 政司・和田 信幸  
若原 孝夫・吉井 正